

令和 5 年 5 月 22 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00681

研究課題名(和文) 総称文研究における認知能力に基づいた枠組みの検証

研究課題名(英文) Verifying the Cognitive Framework of Generics

研究代表者

岩部 浩三 (IWABE, Kozo)

山口大学・人文学部・教授

研究者番号：90176561

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：総称文は子供の認知能力に対応したデフォルト総称文と大人の認知能力に対応した有標総称文に分けられるという「認知能力の複合性仮説」を英語に基づいて定式化し、英語以外の言語で検証を行った。まず、フランス語やドイツ語では、有標総称文が英語とほぼ同様の形式であるのに対し、デフォルト総称文の定冠詞の有無がまったく異なることを確認した。さらに冠詞体系を持たない日本語やヘブル語において総称文の多様性がどのように表現されるかを追求した。そして日本語には「というもの」「ものだ」という表現があり、ヘブル語では2種類のPronominal Copula(代名詞的コピュラ)が使い分けられていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

総称文にはごくわずかの例にしか当てはまらないのに容認される場合があり、その多くは生命にかかわるような危険を述べたものである。このタイプはデフォルト総称文の形式をとり、有標総称文では不自然になる。例えば、Sharks attack bathers(サメは海水浴客を襲う)/??A shark attack bathers(??サメというものは海水浴客を襲う(ものだ))のように容認度が異なる。また、このタイプの総称文が人間に適用されると、社会的偏見や差別を引き起こす要因となる(「イスラム教徒はテロリストだ」等)。しかし、有標総称文と正しく使い分けることで、このような弊害を避けることができる。

研究成果の概要(英文)：I assume that generic sentences are two-folded. Every language has its own default form: the bare plural in English, the definite plural in French, etc. In addition, there are more "sophisticated" forms. For example, English has indefinite and definite singular forms. I attested Japanese and Modern Hebrew, which lack the full-fledged article system, also have sophisticated forms. It is known that so-called striking generics are allowed only in the default form (e.g. Sharks attack bathers/??A shark attacks bathers). It is important to note that every language makes use of the two-fold system of generics, since we will be able to avoid the social prejudices or discriminations that may be caused by the use of striking generics (e.g. Muslims are terrorists/??A Muslim is a terrorist).

研究分野：英語学

キーワード：総称文 認知能力 冠詞 ヘブル語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

総称文については過去にも多くの研究がなされていたが、近年の研究においては、総称文を数量詞や量化副詞と同等に扱う量化分析が一定の成果を上げてきた。総称文はその内容により all, some, most など様々な数量詞に対応するとも考えられるが、特定の数量詞によって代表させることはできないという問題点があった。

- (1) Squares have four sides. (=all)
(四角形には4つの辺がある)
- (2) Tigers are striped. (=most)
(トラには縞模様がある)
- (3) Sharks attack bathers. (=some)
(サメは海水浴客を襲う)

端的には、How many dogs are intelligent? に対して、all, some, most などの数量詞で答えることは可能であるが、Dogs are intelligent という総称文によって答えることは不可能であるように、総称文は数量を表さないという根本的な問題がある。このように、総称文は、言語学的な分析が困難な課題なのである。

その後、Leslie らを中心に哲学的・心理学的側面から、総称文が幼児によって早い段階で容易に習得されることが指摘され、総称文は生まれながらのデフォルト的認知能力に由来すると考えられるようになっていく。たとえば、(3)のような少数にしか当てはまらない総称文の多くは生命にかかわるような危険を述べており、幼児の段階からこれが理解できることは生存上重要な能力となる。その一方で、この習得しやすさと言語学的分析の困難さとの間のギャップが謎となっている。

また、総称文に多様性があること、すなわち英語において上記(1)-(3)の無冠詞複数形(BP)に加えて不定単数形(IS)、定単数形(DS)の3種類があることも十分説明できていない。

- (4) A dog has four legs. (IS)
(犬は4本脚である)
- (5) The Coke bottle has a narrow neck. (DS)
(コーラ瓶は細口になっている)

従来の研究においては、量化分析にしても哲学的・心理学的アプローチにおいても、ほとんどの研究がBPを対象にしており、ISやDSへの言及は断片的になされているにすぎない。BPがもっとも一般的な形であり、ISやDSは特定の意味内容を伴う限定的な使用がなされることが明らかになっているが、そもそもなぜこのような多様性が見られるのかという根本的な問いに対する答えはなかった。

このような状況の中で、岩部(2016)「総称文の多様性と認知能力の複合性--社会的偏見の克服に向けて」『英語と英米文学』51と岩部(2019)「総称文の謎を認知能力の複合性から解く」『JELS』36が、英語総称文の多様性について「認知能力の複合性仮説」からその説明を行おうとしている。この仮説を簡略化して述べると以下のとおりである。

- (6) a. デフォルト的認知能力(子供の認知能力)に対応するのはBPである。他の認知能力が未発達な状態では、ISやDSで区別されるような多様な読みは未分化である。
b. 数理的・論理的認知能力の発達につれて、総称文の読みの多様性が生じ、BP総称文が多義的に感じられるようになる。多義性を分別し、特定の読みに対応する別の形式としてISやDSがそれを担う。

この仮説が正しければ、総称文には「早期に習得できる部分」がある一方で、「大人にならないと習得できない部分」すなわち量化的側面もあることが正しく位置づけられるとともに、そもそもなぜ様々な形式(多様性)が総称文に見られるのか、という根本的な問いへの解答も得られるはずである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「認知能力の複合性仮説」を英語以外の言語において検証することである。総称文を2つに分類する意味は、(3)のような危険回避の総称文は(6a)タイプでのみ許容され、(6b)タイプの??A shark attacks bathers (IS) (??サメというものは海水浴客を襲う)では不自然であるところにある。この種の総称文が人間に適用され、社会的偏見や差別の要因になることが

Leslie 等によって指摘されているが、分類を明確に意識し使い分けることで、この弊害を避けることが期待できる。

子供の認知能力に対応する総称文と大人の認知能力に対応する総称文に分けられるという「認知能力の複合性仮説」の予測は、3種類の形式を持つ英語総称文においては一定の妥当性があると思われるが、総称文は人間の普遍的な能力を反映しているはずであるから、当然他の言語においても成り立つはずである。フランス語やドイツ語など、冠詞を持つ言語における多様性がどのように現れるかを確認するとともに、日本語のような単数複数の区別をせず、冠詞を持たない言語において多様性がどのように表現されるかが、仮説の検証上、特に重要であると考えられる。

3. 研究の方法

「認知能力の複合性仮説」の検証のためには総称文に関するさまざまな言語の研究を追って見る必要がある。まず始めに、ドイツ語やフランス語など、冠詞を持つ言語における総称文の多様性がどうなっているかを確認する。英語同様、これらの言語では冠詞が重要な役割を果たしているはずである。

次に冠詞のない日本語でその多様性がどのように表現されるかが重要な課題となる。これについては日本語母語話者として、直観的にある程度の見通しを得ている。

- (7) a. Dogs have four legs. (犬は4本脚である)
- b. Tables have four legs. (テーブルは4本脚である)
- (8) a. A dog has four legs. (犬というものは4本脚である)
- b. ??A table has four legs. (??テーブルというものは4本足である)

英語の IS に対応する日本語として「というもの」という表現が対応すると思われる。また、文末に「ものだ」のついた表現も総称文と深い関係がありそうである。この直観を基に、他言語とリわけ冠詞体系を持たない言語との関係を検証する。冠詞を持たない言語として、ロシア語やウクライナ語なども候補として考えられるが、Greenberg による総称文研究の文献があるヘブル語を当面の分析対象としたい。

4. 研究成果

4.1 冠詞体系を持つ言語について

まず始めに、冠詞を持つ言語の総称文について簡単に整理しておく。フランス語では、定複数、定単数、不定単数、不定複数の4種類の総称文がある。定単数と不定単数については、英語との違いはない。それに対し、英語の BP に相当するものはフランス語では定複数であって、この定冠詞を省略することはできない。

- (9) a. Les chats sont intelligents. (フランス語)
- b. Cats are intelligent.

それに対して、ドイツ語では定冠詞は任意であるとされる (G. Shaden(2013))

- (10) a. (Die) Wale sind Säugetiere. (ドイツ語)
- b. Whales are mammals.

これらの言語においては基本的な定冠詞の使い方が共通であるのに、総称文においてのみ扱いが三者三様になっている。これはおそらく、総称文が極めて早期(おそらく冠詞体系を習得する前)に習得されることに関係していると思われる

従来、フランス語の不定冠詞複数の総称文はほとんど認められていなかったが、近年の研究ではその存在が認められている。

- (11) a. Des jumaux se ressemblent dans le plus petits details.
- b. Twins resemble each other to the smallest detail.

(11a)のように双子のペアを一組ずつ数え上げるような場合には不定複数形が適切な形式であるが、不定複数冠詞のない英語ではこれも BP で表現するしかない。すなわち英語では、「世界中のすべての双子が似ている」という現実と合わない解釈を、少なくとも文法的には排除できない。ちなみに、同じロマンス語においても、フランス語と異なり、ルーマニア語やイタリア語のように BP を許す言語もあるが、総称文では BP は用いられない。この点は英語と異なる (Dobrovie-Sorin(2013))

このように、総称文における冠詞については言語間の違いが甚だしく、言語学的な一般化はほぼ不可能である。その原因は、(6)で予測したような総称文自体の特殊な位置づけによるものと考えられる。

4.2 日本語からヘブル語への応用

日本語の総称文には、通常の(12a)に対して、主語に「というもの」を付けたり、文末に「ものだ」を付けた形式があり、それが総称文の多様性を支えているという直観がある。

- (12) a. 犬は賢い。
b. 犬というものは賢い(動物である)。
c. 犬は賢いものだ。

それとよく似た現象がヘブル語の代名詞的コピュラ(Pronominal Copula, 以下 Pron と略記)に見られる。ヘブル語の総称文については Greenberg(1998, 2002)が論じているが、要点だけ述べれば「ヘブル語の Pron の出現は総称文に対応している」というものである。この観察と日本語との関係を追求めたのが岩部(2021)「総称文の多様性--ヘブル語と日本語データによる検証」『英語と英米文学』56 である。

ヘブル語の be 動詞に相当するコピュラは総称文においては、動詞ではなく代名詞として出現する。

- (13) zmaxim hem yerukim.
plants Pron(3PL) green
“Plants are green.”
植物というものは青い。

(13)において、Pron の hem は主語と一致している。日本語においても、主語の「植物」を受けた「もの」が生じており、この対応関係は偶然ではないだろう。

Greenberg は、総称文における Pron は義務的であると述べているが、実際には微妙であり、随意的な例も見られるようである。興味深いのは、(14)のように「生き物」に相当する補語名詞を補っている点で、形容詞だけの形では Pron が義務的とまでは言い切れないのではなからうか。

- (14) 'orvim hem (yecurim) Sxorim.
ravens Pron(3PL) creatures black
“Ravens are black (creatures).”
カラスというものは黒い(生き物である)。

形容詞補語だけでなく、名詞を補って同定文にした方が総称文として安定するようである。

その一方で、Greenberg は「同定文は総称文ではない」との主張を行っている。彼女は総称文と Pron の対応関係を追求めしており、同定文には Pron が必ず生じるにも関わらず、である。その根拠は、(15)のように同定文には一時的にしか成り立たないものがあるからであるという。

- (15) ha-yom ha- 'axot ha-toranit hi Rina,
the day the nurse the duty Pron(3FS) Rina
“Today the duty nurse is Rina”
今日、当直看護師はリナだ。

ここで、同定文が成り立つことと、主語と補語の属性が共有される時間とを区別することが重要である。例えば(16)において、主語と補語の人物の属性が共有されることは実質的でない。そもそもこのような場合の同定作業は極めて困難であるが、作品中で示されているような手順に従って我々は(16)を同定文として容認することができる。つまり、同定関係は属性の共有とは独立し、時間を超えて成り立つと考えることができる。

- (16) ジキル博士はハイド氏だ。

我々の目標は、Greenberg のように「総称文と 1 対 1 に対応する言語形式を発見すること」ではなく、総称文の多様性を検証することである。同定文は総称文の一種として位置付けられるべき文法形式であり、その可能性を追求めたのが、岩部(2022)「総称と同定--ヘブル語代名詞的コピュラと日本語同定文」『英語と英米文学』57 である。

Greenberg(2008)によれば、ヘブル語の Pron には上で述べた H 型(PronH)のほかに Z 型(PronZ)があるという。

- (17) 'iSun ze mesukan
smoking.MSC PronZ.MSC dangerous.MSC
‘Smoking is dangerous’

喫煙は危険なものだ。

PronH が(18a)のように主語と一致するのに対し, PronZ は補語と一致し同定を表す。PronZ が生じる場合, 補語形容詞は主語に一致しないので, (18b)のように主語が女性形の場合も性はデフォルトの男性形のままとなり, PronZ もそれに一致して男性形になる。

(18) a. clila hi mesukenet
diving.FEM PronH.FEM dangerous.FEM
'Diving is dangerous'
ダイビングというものは危険だ。

b. clila ze mesukan
diving.FEM PronZ.MSC dangerous.MSC
'Diving is dangerous'
ダイビングは危険なものだ。

主語に一致する PronH の日本語訳には「というもの」を与えたのに対し, 補語に一致する PronZ には「ものだ」を付加したが, これは(19a)のような同定文を元にした表現と考えられ, ヘブル語の PronZ と同等の構文であろう。そしてさらに(19b)のような再分析が行われたと考えられる。

(19) a. [犬]は[賢いもの]だ。
b. 犬は賢い[ものだ]。

以上の(17),(18b),(19a)はいずれも同定文であり, まぎれもなく総称文である。すなわち, Greenberg の所見とは異なり, 同定文は総称文の一種である。そして日本語では, 同定文を元に総称を表す「ものだ」というモダリティ表現が生まれていることも興味深い。

最後に, 私が近年改訂しながら提案している「認知能力に基づく総称文研究の枠組み」を表にまとめておくことにしよう。

(20) 認知能力に基づく総称文研究の枠組み

速い思考 (システム 1) : 子供の認知能力 (危険回避・直観的行動, 社会的偏見, 脳の負担小)
デフォルト総称文: Striking Generic 可能, 複数形の使用, 冠詞の使い分けが (厳格で) ない (英語・ドイツ語・フランス語), Pron の使い分けが (厳格で) ない (ヘブル語)

遅い思考 (システム 2) : 大人の認知能力 (社会的偏見を避ける論理的行動, 脳の負担大)
有標総称文: 冠詞の使い分け (不定冠詞単数, 定冠詞単数, 不定冠詞複数 (フランス語)), 量化 (数量詞, 法性), 「 <u>というもの・ものだ</u> 」の使い分け (日本語), 二重否定, Pron の使い分け (ヘブル語), 同定文, エピソード的総称文

この表を見て気づくことがある。上段の「速い思考」が直観的, 非論理的であることはすでに指摘されているところであるが, それに対応するデフォルト総称文はある意味で「非言語的」である。例えば, 定冠詞の有無が言語によって異なったり, 使い分けがなかったりすることがすでに観察されている。つまりデフォルト総称文においては, 形式と意味の対応関係, とりわけ個別言語を超えた一般化という言語学的目標を追及しても仕方がないのである。逆に, 言語学的研究が成果を上げやすいのは下段の有標総称文の方である。一時代を画した量化理論による総称文研究も, Greenberg によるヘブル語 Pron の研究も, むしろ有標総称文の研究として位置付けるのがふさわしいであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 岩部浩三	4. 巻 56
2. 論文標題 総称文の多様性--ヘブル語と日本語データによる検証--	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英語と英米文学	6. 最初と最後の頁 29-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩部浩三	4. 巻 57
2. 論文標題 総称と同定--ヘブル語代名詞的コピュラと日本語同定文	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 英語と英米文学	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岩部 浩三
2. 発表標題 総称文の多様性と認知能力の複合性--英語から他言語へ
3. 学会等名 筑波英語学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------